

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4070702677		
法人名	有限会社 福の里		
事業所名	福の里 グループホーム結		
所在地	福岡県北九州市八幡西区楠橋上方2丁目18-37		
自己評価作成日	令和7年1月26日	評価結果確定日	令和7年2月20日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報の公表制度のホームページで閲覧してください。

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/40/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ヘルスアンドライツサポートウリズん
所在地	福岡県直方市知古1丁目6番48号
訪問調査日	令和7年2月13日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

八幡西区楠橋の静かな住宅街の一角に平屋建てで、屋根から太陽の日差しを感じられる窓があり、明るい雰囲気である。庭には畑があり、近隣の方等が花など植えられており季節を感じられる。 職員の年齢も20歳代から80歳代と年齢層も幅広く、得意な事・苦手な事をお互いにカバーしながら適材適所で個々の力を発揮している。 また、外国人職員を積極的に雇用し、国籍を超え共に力をあわせながら仕事をしている。理念を毎日の朝礼で唱和し、認知症高齢者が笑顔で過ごせるように支援し、私達も笑顔で仕事をしている。行事もコロナ等の感染症にて困難な事もあるが、季節を感じたり良き思い出ができる様に工夫しながら企画し楽しんでいる。医師や訪問看護と連携を取り利用者様の看取りを行った事例があり、今後もご本人やご家族の意向に添いながら、福の里を終の住処として安心して選んで頂けるように努めている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

新規入職時に理念を分かりやすく説明し、朝礼での唱和で日々意識づけをしている。思いや意向を表出できる入居者も多く、日頃の関わりや言動を通じて思いや意向の把握に努め、現状に即したケアで「入居者さんに笑ってもらえるのが楽しい」と職員は話している。家族の要望で入院先から帰園された方をかかりつけ医や訪問看護との連携で看取り、他の事業所では叶わなかった家族の意向を受け入れ、面会や泊まり込みを支援し、夫々の家族から「最期を看れて良かった」と謝辞を受けている。近隣幼稚園の年間行事にホームとの交流が毎月計画される程信頼を培い、昨年回覧板で案内した秋祭りは悪天候にも関わらず20名以上の参加があり、大盛況であった。今後も、家族会や運営推進会議で運営状況を報告し、外国籍の職員とも一丸となって理念の「職員も入居者も笑顔」で、家族も笑顔になるサービス展開が期待できるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~57で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
58 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:25,26,27)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	65 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,21)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
59 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:20,40)	<input type="radio"/> 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	66 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,22)	<input type="radio"/> 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
60 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:40)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりの拡がりや深まりがあり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	<input type="radio"/> 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
61 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:38,39)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
62 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:51)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	69 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
63 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:32,33)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	70 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
64 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:30)	<input type="radio"/> 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

ユニット／事業所名 **福の里 グループホーム 結1**

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義を踏まえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「職員も利用者様も自分らしく笑顔でいれる場所」この理念を施設内に掲示、毎日の朝礼で唱和を行い職員間で共有する事で、質の良いサービス提供を実施していく。	新規入職時に理念を分かりやすく説明し、朝礼での唱和で日々意識づけをしている。「入居者さんに笑ってもらえるのが楽しい」と永年勤務している職員は話している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一人として日常的に交流している	地域の文化祭の参加や自治会に加入し会議に参加している。毎月近隣の幼稚園との交流が再開にて施設に来られたり、幼稚園に職員・利用者様と伺ったりとしながら交流を増やしている。	近隣幼稚園の年間行事に毎月交流が計画され、幼稚園の花まつりに参加したり、ホームで歌の披露やプレゼント、芋ほりのおすそ分けが行われている。昨年回覧板で案内した秋祭りは、悪天候にも関わらず20名以上の参加で大盛況であった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎年の秋祭りには地域の方達や子供達も参加してもらい、オープンな施設の中で利用者様の様子や職員の支援の方法を知っていただき、行事を共に楽しんでもらっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	民生委員の方・包括支援センターの方・老人会の方の参加があり、貴重な意見や質問・提案などをして頂き参考にし改善に繋げている。	前回の会議はクラスターが発生し、書面会議となっている。会議では入院や看取り、新規入居など入居者の動向や行事、ヒヤリハットなどを報告し、クラスター発生の経過報告に参加者から労いの言葉があった。会議録を整備している。	会議録を目に付きやすい場所で公表されるとともに、ホーム便りに運営推進会議設置目的や開催案内、会議内容の報告などの掲載で家族の参加を募り、災害対策など現状に即した議題を取り上げるなど、会議を活かす取り組みを期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	包括支援センターの方や民生委員・老人会会長の方との情報交換はできている。	毎月担当部署にFAXしている居室情報は市のホームページに掲載されている。当該入居者の暮らしぶりや管理者の業務内容について、夫々の担当者に報告や連絡、相談をする関係を日頃から築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は玄関は解放している。身体拘束廃止委員会を3ヶ月に1回実施し、身体拘束の現状や改善点について職員に周知できるようにしている。また、物理的な拘束だけでなくスピーチロックのような精神的な拘束廃止にも力を入れている。	法人の全職員が身体拘束適正化委員会に所属し、定期的な会議や研修の開催で適切なケアに努めている。家族の了解を得て夜間のみセンサーを使用し、「待つて」には納得できる説明を加え、大声は職員間で注意し合っている。共用空間にビデオカメラを設置し、転倒防止や転倒した際の検証に活用している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止法等について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	日常ケアの中で職員の何気ない言動が虐待に値する事を日々伝えながら、研修にても議題に挙げ虐待防止に努めている。小さな傷や皮下出血も発見時には、上司に報告し記録に残している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8	(6)	○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるように支援している	説明できるようにパンフレットを準備している。研修にて職員にも理解できるようにしている。入居時に必要な方には説明を行い、入居後に必要となった場合にも家族・関係者に十分に説明し支援している。	現在まで日常生活自立支援事業や成年後見制度の活用はない。状況に応じて活用を支援するために、事業や制度に関する資料を整備し、研修を年間研修計画に組み入れている。	今後さらに多様な家族構成や経済状況の変化が予測されることから、日常生活自立支援事業や成年後見制度の内容やその違いについて学ぶ機会を設けられることを期待します。
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居の相談時は病院の事や入居後の生活・入院した時の事等、心配事が多いが不明な点はその都度説明している。契約時に再度安心して頂けるように丁寧に説明している。		
10	(7)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員並びに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設置している。要望や苦情があった場合は内容と改善方法を提示し、家族会でも報告している。又、家族面会時や電話での問い合わせの際にも、日常の情報や要望をお聞きしている。	12月の家族会はクラスター発生で中止したが、6月は10名の参加があり、運営状況を説明している。家族来訪時や電話、毎月のホーム便りでクラスターの経過や個別の暮らしぶりなどを報告している。購入をお願いした衣類のサイズなどの問い合わせに応じ、インフルエンザやコロナワクチン接種、年末年始の外出や外泊の意向を伺っている。	
11	(8)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	定期的に面談を行ったり、会議を開き発言する機会を設けたりとしている。意見や決定事項は、職員全員が把握できるように掲示し情報を共有している。	ユニット会議や申し送り時など率直な意見交換の場を設け、気になる点は随時話し合い、連絡ノートで共有している。外国籍の職員が連絡ノートの理解やコミュニケーションが容易でない場合は、ゆっくり話したりできる限り母国語で説明し、意見表出を支援している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	その時の個々の能力に合った研修の受講を勧め、研修費の援助を行っている。適材適所を考え、効率よく働けるように配慮している。		
13	(9)	○人権の尊重 法人代表者及び管理者は、職員の募集・採用にあたっては性別や年齢等を理由に採用対象から排除しないようにしている。また、事業所で働く職員についても、その能力を發揮して生き生きとして勤務し、社会参加や自己実現の権利が十分に保証されるよう配慮している	20歳代～80歳代の職員が得意な所を發揮しお互いにフォローしながらチームワークをとっている。年齢・性別・経験・資格等関係なく「自分の親だったらどうするのか」と自身に置き換えて、優しく思いやりのある支援方法を考えながら実施している。又、外国人職員も働いており言葉の壁を乗り越えながらコミュニケーションを大事にしている。	オンライン面接後、外国籍の職員が数名入職している。法人全体で研修を実施し、敷地内の系列事業所やユニット間の異動もあり、日勤や短時間、夜勤専従等、夫々の段階や状況に応じて勤務している。厨房や清掃のみもあり、親族で勤務する職員もいる。言葉の壁はチームで対応するなど、笑顔でいきいきと勤務できる職場づくりに努めている。	
14	(10)	○人権教育・啓発活動 法人代表者及び管理者は、入居者に対する人権を尊重するために、職員等に対する人権教育、啓発活動に取り組んでいる	研修や会議を行い、知識や情報を共有している。又、日々のケアの中でも気づいた事はお互いに声を掛け合いながら確認しあっている。体調や精神的な変化にも、すぐに気づけるように努めている。	身体拘束や虐待防止に関する委員会や研修会を通じて、人権教育や啓発活動に取り組んでいる。入居者と職員の権利擁護は同義として、重要事項説明書に入居者やその家族からの具体的なハラスメント内容を明記し、契約書にサービスの解除を謳っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
15		○職員を育てる取組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修の際はロールプレイングを取り入れたりと分かりやすくできるようにしている。現場でも不安な事等を質問できる環境を整え、個々に応じた指導を行っている。 OJTにて日々学んでいる。		
16		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会をつくり、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取組みをしている	研修はリモートが多いが、同業者と常に連絡を取り合い情報交換を行っている。又、施設訪問等にて交流をはかっている。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
17		○初期に築く本人との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に家族・ケアマネ・入院機関等から十分に情報収集し、環境の変化で心身に負担をかけないように配慮しつつ、ゆっくりと本人が安心感を得られる環境・人間関係を構築している。又、本人・家族の意向に寄り添えるよう、支援している。		
18		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスの利用を開始する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前にご家族も心配な事が多いと思われるので、困っている事・不安に感じている事に細かく答え安心できる信頼関係を築ける様に努めている。又、話やすい雰囲気作りにも努めている。		
19		○初期対応の見極めと支援 サービスの利用を開始する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人とご家族が何を求めているのか、今後どのような生活をお送りたいのかをしっかりと細部にわたり情報収集し、その方に一番ふさわしいサービス提供にてより良い暮らしになるように支援している。状況に応じてサービス出来るように努めている。		
20		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場に置かず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	身体的に困難な方には、昔の話の中から知識や知恵をかり、身体的にお元気な方には日々のお手伝いや行事・レクリエーションに力を借り共同生活を送っている。一方的にしてあげるのではなく、互いに支えあい関係を築いている。		
21		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場に置かず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	対面での面会や外出・外泊の要望にも応じている。面会時には日常の様子を報告し、変化のある時は電話で報告させてもらっている。毎月の福の里だよりでも生活の様子や健康面せの事をお知らせしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22	(11)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会も対面式にての対応をおこなっている。携帯電話を所持されているが、使い方が分からなかった利用者様には職員と一緒に操作している。また希望があれば施設の電話を使用したりお手紙での交流も支援している。	昨年12月クラスターが発生し、1月は面会を中止していたが、現在は予約制で、時間や人数の制限はあるが対面での面会を再開し、調査当日は娘や夫と笑顔で話す入居者があった。家族同行で馴染みの美容院に出かけたり、外出や外泊を支援し、訪問理美容の利用も継続している。	
23		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	関係性を築いている方は、会話しやすいように席を隣にするなどの配慮を行っている。コミュニケーションが難しい方は、職員が間に入り交流が図れるように対応している。		
24		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	入院された方に面会にて会いに行くことがあった。またご家族が来られたり電話で入院時の様子等を報告して下さる事もある。契約終了者の親族がご相談に来られたり、新たな契約者になったりと繋がりが続いて行く事もある。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
25	(12)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の関わり合いの中で、ご本人様の思いを傾聴したり言動や表現などを見て、出来る限り環境や暮らし方の希望に添えるように、ご家族様の協力も得ながら支援している。	「できない事が増えたので職員さんの手を借りながら過ごしたい」など、思いや意向を表出できる入居者も多い。夫々の生活歴や家族構成、入居に至るまでの経緯などを共有し、日頃の関わりや言動から思いや意向の把握に努め、毎日テレビコーナーのソファで毛布を被って午睡する入居者の思いを支援している。	
26		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	馴染みの家具や持ち物を持ってきてもらい、以前の生活に近い環境を作っていく事や、継続できる習慣は共に行き、その人らしい生活が送れるように支援している。		
27		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人一人の状態は異なるので、その日の体調に合わせて安静臥床や体操・散歩とその方に臨機応変に柔軟に対応している。また、脚力の維持などを意識しながら、無理のない程度にレクリエーションを行っている。		
28	(13)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	少しずつ変化していく利用者様の健康面や状況に合わせ、居室担当職員と共に状態の変化やニーズ等の情報を共有し、担当者会議を通じてその時点での最適な介護計画書を作成するように務めている。	入居者や家族の意向、職員の気付きやモニタリング結果などに沿って介護計画を見直し、現状に即したケアに努めている。日中は歌が好きで洗濯物たたみに勤しみ、面会家族と談笑しているが夜間は不穏状態になる入居者もあり、頻回な巡視で対応している。	「入居者が自分らしく笑顔でいる」ために、医療を含め関係者がチームとなって情報の共有や課題の抽出、多角的な視点で、BPSDの出現防止や早期対応を期待します。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の様子は支援経過に記録し、朝礼・終礼で一人一人状態を報告し共有している。連絡帳での報告・連絡・相談で情報を共有し、担当者会議や職員会議でケアプランや現場での見直しに繋げている。		
30		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族関係や生活歴・病歴等の情報収集をおこない、入所後も新たな情報は個人ファイルに更新していき、定期的に全職員が把握するように啓発しながら、その時の利用者様の状態に合わせて柔軟に支援できるように務めている。		
31		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域の文化祭に参加したりしていた。近隣の幼稚園との交流で行事に参加させてもらったり園児さん達が歌や踊りなどを披露しに施設に来られたりと交流を深めている。		
32	(14)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医の先生とは、状況の報告や相談を密に行っている。利用者様によっては、歯科・精神科・皮膚科と必要な科に受診や往診が受けられるよう支援している。緊急時の本人・家族の希望病院も把握し、状況に応じ支援している。	週3回血液透析の送迎を支援し、協力医療機関や入居前のかかりつけ医、精神科や皮膚科などの専門科、歯科から定期的な訪問診療を受けるなど、適切な医療受診を支援している。24時間オンコール可能な訪問看護で健康を管理し、早期受診や治療につなげている。	
33		○看護職員との協働 介護職員は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職員や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	状態変化を早期に発見に把握する為、一日3回のバイタル測定を実施している。看護師は常駐していないが電話連絡にて相談したり訪問看護が来られた際に相談や報告を行っている。受診や検査がスムーズにできるように報告は密に行っている。		
34		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、また、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。又は、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入退院時は必ず情報を医療機関と書面にて交換し、入院中でも定期的に医療機関と連絡を取り、退院後の適切なケアができるように務めている。 先生にも早期退院にて、早く元の環境に戻れるようお願いしている。		
35	(15)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	利用者様・ご家族様の要望を伺い、当施設で可能であればかかりつけ医・訪問看護と連携し、家族も泊まれる等対応しながら支援している。 直近では令和6年7月に看取りケアを行っている。	家族の要望で入院先から帰園された方のかかりつけ医や訪問看護との連携で看取り、他の事業所では叶わなかった家族の意向を受け入れ、面会や泊まり込みを支援し、夫々の家族から「最期を看れて良かった」と謝辞を受けている。夜勤帯の職員の不安を訪問看護との連携で軽減し、今後も看取りを支援する予定である。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
36		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変や事故発生時のマニュアルを作成し、夜間など職員が少数の場合にも対応できるように準備している。 外国人職員には会議を通したり、先輩職員から指導を受ける等おこない理解できるようにしている。		
37	(16)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の消防訓練を行っている。実践力が身につくように、火元は職員に伝えず臨機応変に対応できるよう訓練している。 水消火器を借り、初期消火の訓練も行っている。	法人全体で夜間帯を含め年2回消防訓練を実施している。ハザードマップが壁に掲示され、指定避難所を理解している。米や飲料水は厨房で、衛生用品や感染予防グッズは園庭の備蓄庫で備蓄している。管理者は、BCPの研修やシュミレーションを繰り返し実施し、対応を身につけたいと話している。	地域との協力体制を構築するために、運営推進会議でBCPの研修やシュミレーションにおける課題や対応について報告されるとともに、地域の防災体制に関する情報把握を期待します。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
38	(17)	○一人ひとりの人格の尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者様の身心の状態や気持ちを考えて、言葉を選び対応している。気になる言葉かけをしている時は、その場で注意し改めている。朝礼や終礼で問題提起し、言葉かけや人格の尊重、誇りを守る事の重要性を伝えている。	反応が良い「お母さん」もあるが、氏名での呼称を基本とし、「どうされましたか」と声をかけて居室間違いを回避している。「〇〇さん、お部屋を見せてもらって良いですか」と声をかける管理者の姿や入居者の穏やかな暮らしぶりから、日頃の対応が伺える。	
39		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	どうしたいのか、何を求めているのか、困っている事は何かを常に気にかけて、可能な事は実現している。声かけや質問もクローズドクエスチョンにならないように心かけている。意思表示・意思疎通が困難な方にはいくつかの選択肢を準備する等している。		
40		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者様のペースに合わせて、本人からの要望があればしっかりと話を聞き希望に添えるように支援している。 意思表示が困難な方には少しでも要望が聞きだせるように言葉かけを行っている。		
41		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	昔から使用している鏡や化粧品を使い身だしなみをされる方もおられ、個々の生活を尊重しながら支援している。意思表示困難な方にはご家族様から好みを伺い支援している。訪問美容の際には好みの髪型えお伝えカットされている。		
42	(18)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	毎日の献立を伝えることや季節の食材や行事食の提供にて食事が楽しい時間になるようにしている。 食後の下膳などできる利用者様には職員と一緒にこなしている。	厨房から美味しそうな匂いが漂う中、口腔体操で円滑な咀嚼や嚥下を支援している。視力が低下した方には献立を説明し、見守りや声かけ、介助で夫々のペースで完食している。毎月恒例のちらし寿司やおせちなどの行事食などを楽しみ、下膳や食器拭きなどを手伝う入居者もいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	嚥下状態や疾患等把握し個々に合った形態や量を考慮している。水分量の把握は食事・おやつ・希望時に提供し記録に残していり。嚥下不良の方にはトロミやゼリーなどで提供。栄養不十分な方には栄養補助飲料等にて水分補給をしてもらっている。		
44		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアを行っている。拒否ある方はタイミングをみて行っている。自歯が無い方やうがいができない方はスポンジブラシを併用している。就寝前には義歯をポリドント洗浄し、口腔内の清潔保持に務めている。		
45	(19)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている	尿意便意を訴えられない方でも、定期的にトイレ誘導行い、起立不良な方は二人介助でトイレでの排泄を支援している。尿意ある方にも食前食後などタイミングをみて声かけ行い、失禁を減らすようにしている。	日中は夫々の排泄パターンに沿って、声かけや誘導、2人体制などでトイレでの排泄を支援している。夜間は尿取パットの交換や、安定性のある家具型ポータブルトイレの活用でトイレごとの転倒を予防し、手早い後始末で不潔行為を回避している。	
46		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	十分な水分摂取ができるように支援している。また、体操やレクリエーション・園庭散歩等で活動量を増やし、便秘の予防対策をとっている。		
47	(20)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々に応じた入浴の支援をしている	入浴の声かけにて入って頂いているが、拒否ある方には毎日の声かけにて入浴して頂くように支援している。菖蒲湯やゆず湯など季節感を味わってもらいながら楽しく入浴ができるように取り組んでいる。	脱衣場に設置されたエアコンで、ヒートショックを予防し、週2～3回を目途に入浴を支援している。広めの個浴槽で季節の菖蒲湯や柚子湯を楽しみ、家族が持参した好みのシャンプーを使用する入居者もある。	
48		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	職員は個々の睡眠パターンを共有しており、日中の安静臥床の時間や居室にて過ごしたい時には自由に休めるように支援している。夜間や就寝前にはエアコンや湯たんぽ等で快適な環境にて休んで頂けるように支援している。		
49		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の説明書きは薬と共に見れるようにしており、変更時や臨時薬などある時は申し送りにて周知している。病状の変化時には報告をおこなっている。与薬時も職員ダブルチェックにて誤薬のないように努めている。		
50		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	入居の際に情報を記入し生活歴など把握できるようにしている。日課で洗濯物たたみやゴミ箱作り、園庭散歩など職員と一緒にしたりと役割や楽しみ、気分転換の支援をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51	(21)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。また、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩に行く時間を設け気分転換や四季を感じて頂けるように務めている。コロナ禍で行けなかった外食も好きなメニューを選んでもらい実践している。また、ご家族から旅行や外食の要望がある方は一緒に行けるように対応している。	日頃は周囲の展望が良い広い園庭の散歩で気分転換を図り、年末年始には家族との外出や外泊を支援している。今後は感染状況を見計らいながら、ドライブを兼ねた外食を予定している。	
52		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を持つ事で安心される方は、ご家族に了解していただき所持されている。外出時には自分のお金で買い物ができるように支援していきたい。		
53		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話がある方は自由に使ってもらっている。ご家族から電話や要望があれば連絡をとって会話されたり難聴の方には代わりに要件を伝えている。手紙など読めない方は、職員が代読したり居室にかざったりとしている。		
54	(22)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	毎日、1時間おきに換気を行なっている。居室は毎日、空気清浄機にて除菌し感染症の予防も行っている。天気の良い日は天井からの自然の光を浴びる事もできる。食堂や和室に季節の飾り物を飾ったり誕生月にはポスターを飾ったりと工夫している。	廊下には訪問した幼稚園の花祭り時の写真や園児からの贈り物や手紙が掲示され、換気を促す苑内放送が流れている。昼食後は定位置で手遊びしたり、洗濯物たたみに勤しんだり、テレビコーナーのソファで毛布を被った午睡が恒例となったり、午後はお茶を飲みながらトランプゲームに興じるなど、夫々が心地良く過ごせる空間となっている。	
55		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂で気のあった方同士で談笑されたり、ソファで横になりたい方はそのような環境を整えたりと好きな場所で居心地よく過ごして頂けるような居場所作りを工夫している。		
56	(23)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居の際は、ご本人の馴染みの家具や衣類、写真など利用者様が落ち着かれる物があれば、持ってきてもらっている。以前の生活に近い環境作りに努め安心して生活できるように取り組んでいる。	全居室入口には職員手作りの表札が掲示され、大きく氏名を掲示し居室間違いを防止している居室もある。窓に嵌め込まれた障子戸からの陽光が温かく、箆箆や洋服かけ、飾り棚の上にはお気に入りのバックが置かれ、テレビの横の本棚に好きだった映画のDVDが整然と並べられるなど、入居前の暮らしぶりや家族の思いが伺える設えとなっている。	
57		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」や「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人一人のレベルに合わせ出来るところを職員が理解し、手を出さずに見守り、介助過多にならないよう自立支援の視点でケアを行い、明るい声かけを心がけている。		